

琵琶湖博物館フィールドレポーター・スタッフが イチョウウキゴケの生活史に関する論文を発表しました

琵琶湖博物館フィールドレポーター・スタッフとして数々の調査に関わってきた前田雅子さんが、イチョウウキゴケという水田に生育する苔類の生活史について、兵庫県立人と自然の博物館研究員、琵琶湖博物館学芸員との連名で論文を発表しました。

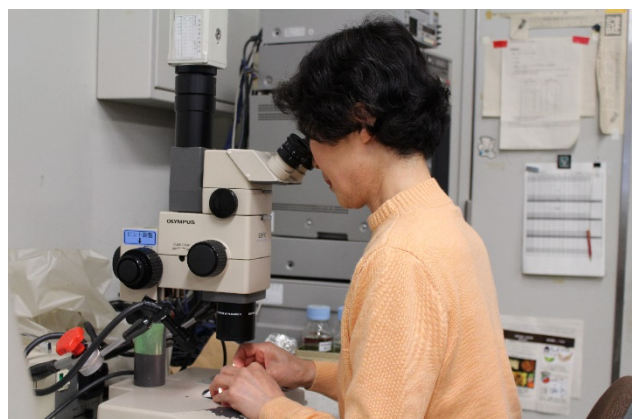
イチョウウキゴケは、環境省のレッドデータブック(2014)で準絶滅危惧種に位置付けられていますが、その詳しい生活史は明らかになっていませんでした。前田さんは、2010年のフィールドレポーター調査「イチョウウキゴケを探そう」でイチョウウキゴケに興味を持ち、この調査が終了した後も、滋賀県内の水田で観察を行い、その生活史を調べ続けてきました。現地で採取したサンプルを博物館の顕微鏡などを用いて詳細に観察し、生殖器官の形成や孢子体の発達の様子・時期などを記録し、イチョウウキゴケの有性生殖は浮遊する形と関係があること、水田の利用方法(水稻栽培ごよみ)に影響を受けている可能性があることなどを、綿密なデータで示しました。

今回の論文は、イチョウウキゴケの生活史研究に新しい知見を加える貴重な成果であると同時に、琵琶湖博物館のフィールドレポーターとして活動する中から、科学的に意義のある研究が生みだされた素晴らしい事例だと考えています。なお、この論文は、兵庫県立人と自然の博物館の研究紀要「人と自然 Human and Nature」27号に収録されています(論文はWEBページにて公開中)。

<http://www.hitohaku.jp/publication/r-bulletin/2016-005.pdf>



イチョウウキゴケ



研究を行う前田雅子さん

論文の概要

滋賀県大津市のイチョウウキゴケの有性生殖を行う集団において、2014年5月8日から7月28日の間、週2回合計23回にわたり、各回とも葉状体5個体を対象に造精器・造卵器が形成される位置と数、ならびに胞子体への成長過程を記録した。5月初旬の水田の水入れのあと10日前後で造精器の形成が確認され、その後全期間中を通じて造精器が見出された。一方造卵器は5月の下旬から確認でき、6月初頭に受精が始まった。受精した卵はすばやく成長し、6月中旬から7月中旬にかけて黒熟した胞子を生じた。生殖器官ならびに胞子体の発達にともない、葉状体中央部の溝の形状が広がることを確認した。6月下旬に中干しによって水田の水が抜かれると、水不足などによって胞子体の成長が著しく阻害され発育不全となる事例が急増した。イチョウウキゴケの胞子体は秋にも生じるが、偶然の好条件が重なることによる例外的な事象であると考えられる。

前田雅子・秋山弘之・芦谷美奈子 (2017) イチョウウキゴケの生活史1 水田環境における生殖器官ならびに胞子体の成長の観察. 人と自然 Human and Nature : 27, 43-52.

琵琶湖博物館フィールドレポーター制度

琵琶湖博物館では、1997年度から滋賀県内の自然や暮らしについて、身の回りで調査を行い、定期的に博物館に報告をしていただくフィールドレポーター制度を運営しています。毎回、さまざまなテーマを設定し、そのテーマについて分布や情報を集めています。最近のテーマは「飛び出し坊やを調べよう」、「タンポポ調査」、「ミノムシ調査」となっています。フィールドレポーターは随時受け付けており、更新すれば何年でも引き続き行うことができます。